

夢中な「Student」を応援する!

2025
vol.3

夢中dent プロジェクト

人々の夢中を応援するクラシエが出会った、夢中dentたち。
ときに挫折し、ときに苦悩し、それでも夢中になって突き進む彼らの物語を冊子にしました。



クラシックバレエに夢中
新川 良羽



しゃぼん玉
パフォーマンスに夢中
西森 志帆

夢中な「Student」を応援する！

夢中dent プロジェクト

何かに夢中な若者「夢中dent」。
彼らの夢中に対する想いや
夢中の魅力を取材し、冊子にしました。
なかなか夢中になれない時、
夢中な気持ちを忘れてしまった時、
もう一度、夢中になってみたい時。
読んでみて欲しい一冊です。

Contents

p.03 新川 良羽 YOHANE SHINKAWA

バレエをもっと広めることで、
誰かの夢中も応援したい。

p.08 西森 志帆 SHIHO NISHIMORI

癒やしを届けるシャボン玉で、
みんなの心も上向きに。

p.13 編集後記 / 企業情報



バレエをもっと広めることで、
誰かの夢中も応援したい。

クラシックバレエに夢中 新川 良羽

幼少期に固まったプロバレエダンサーの夢

プロのクラシックバレエダンサーになることを目指し、今まで12年間バレエを続けている新川さん。クラシックバレエと初めて出会ったのは3歳の時でした。「母が『ドン・キホーテ』というバレエの動画を見ていたのを僕もたまたま見て、これがやりたいってダダをこねたらしいです。それまでは自分から何かしたいって言うことがなかったみたいで、母も驚いたようでした。念願が叶って、本格的にバレエ教室に通い始めたのは4歳の時。音楽に合わせて動いたり踊ったりするのが楽しかったのと、他のバレエダンサーの踊る姿を見てカッコいい!と憧れた

記憶が残っています。そこからどんどん夢中になっていって、7歳の時にはプロのバレエダンサーとして生きていくんだって決意していました」。

自身が3歳の頃にバレエを見て衝撃を受けたように、バレエの魅力は踊りを見るだけでエネルギーがもらえることだと新川さんは話します。「踊りや表情、音楽や演出など全てが合わさせて、踊っている人の感情や意思が伝わってくる。踊りの美しさやダイナミックさを楽しむだけじゃなくて、心の中で爆発するようなエネルギーをもらえるのがバレエという芸術だと思っていて。だから僕も、まずは自分自身が踊りや曲に感動すること、そしてその気持ちを見る人に伝えられるように踊ることを大事にしています」。

怪我を超え、大舞台で掴んだ自信

夢に向かって着実に歩みを進めながらも、その道のりでは苦労や怪我もあったと言います。「中学2年生のはじめの頃、練習のしすぎで五十肩になってしまって。何十年早いんだって話ですけど…。でも肩が痛くて、一時期バレエができないタイミングがありました」。怪我の期間中は、床に体をつけたままバレエの動きを行う床バレエの資格を取得しインストラクターとしてバレエを継続。しかしその時期には、バレエを辞めるか葛藤したこと也有ったそう。そんな中で転機となったのは、2022年末に行われた『洋舞合同祭』でした。

「『洋舞合同祭』という大きな舞台のオーディションがあるって母に教えてもらって。ダメ元で全部出しきるつもりで挑戦したら、合格をいただくことができました」。怪我を乗り越えて掴んだ大舞台への出演機会。本番の時のことは、今でも鮮明に覚えているそうです。「演目の最後に、ピルエットという片脚で体を支えながらクルクル回転する技をやったんですけど、キレイに回転してビタッとキメることができて。すごく気持ち良かったです。練習を頑張った分だけちゃんと上達するんだって思えて、自分の踊りに自信を持てるようになりました」。

今でも落ち込んだりすることはあるそうですが、それでも続けられるのはバレエが好きだからだと言います。「バレエはもはや人生の一部。自分はバレエをやるために生まれてきたって、いい意味で思い込んでいます」。



留学で見つけた理想のバレエ

2024年には文部科学省が支援する留学促進キャンペーンの高校生部門に見事選出。海外のバレエを学ぶため、イギリスへ短期留学しました。そこでは、日本とは全く違うバレエ文化を肌で感じたと言います。「日本のバレエはテクニック重視のイメージ。コンクールや発表会で入賞するためにバレエ教室に通う人が多かったり、ストイックな指導スタイルが多かったりと、スポーツ化している側面もあるような気がしています。だから、芸術性を重視していくフレンドリーな雰囲気のイギリスのバレエ教室は新鮮でした。たとえば、演劇を行ったり自分で振り付けを考えたりと、バレエの表現について学ぶレッスンもあるんです。指導方法も、最初に褒めてから、こうするともっと良くなるよって改善点を伝えてくれる。上達だけを目的にするのではなく、バレエを好きな気持ちや演じる楽しさを伸ばすことも大事にしている感じがありました」。

イギリスではバレエを続けたい学生の支援体制や教育環境が整備されており、中学以降もバレエを続けている人が多いそう。また、街中のさまざまな場所にバレエ公演の広告があったりと、生活の中でもバレエを感じることが多かったと新川さんは言います。その学びは、バレエへの夢中をさらに加速させました。「テクニックを競うだけじゃなくて芸術として楽しむことも大切にするバレエとの向き合い方とか、本格的に続けたい人をサポートする学生への支援体制とか。イギリス留学で、僕の目指したいバレエ像がよりハッキリしました」。

日本人にとって、バレエをもっと身近な芸術に

新川さんには、プロのバレエダンサーになること以外にも夢がありました。「バレエや、特に男子バレエの魅力をもっと世の中に広めていきたいです」。バレエは女性のイメージがまだまだ強いため、男子バレエの理解や認知にはたくさんの課題があると言います。「僕自身も小学生の時に、男子なのにバレエをやっているという理由でいじめられたことがあります。きっと僕以外にもそういう思いをしているバレエ男子はたくさんいると思っていて。好きなのに周囲や環境のせいで続けられないという人をなくしたいです。そのためには、バレエをもっと広めることが大切だと思っています。バレエがもっと一般的になったら、バレエをする人の数も増えるだろうし、そうすると理解者も増えていくはずだから。いずれは、若い人を中心に日本人全員がバレエを知っているくらいにしていきたいです」。



男子バレエを広めることが、支えることに

SNSで自身の踊る動画を投稿したり、男子バレエの魅力を伝えるセミナーを主催するなど、男子バレエを広めるという夢に向かって既に活動を始めている新川さん。今後も活動の幅を広げていきたいと語ります。「まずは既にバレエをやっている男子を減らさないことが大切だと思っていた。不安をなくせるような取り組みとして、バレエ男子同士がつながれるコミュニティをつくりたいと思っています。バレエ男子って孤独を感じることも多いからこそ、仲間がいたら不安や悩みを共有できるし、何より続ける理由にもなると思うんです。それに、たとえば日本国内には男子向けのバレエ用品メーカーがほとんど無かったりと、まだまだバレエ男子向けの環境が整っていないところも多い。

だからコミュニティがあれば、情報交換ができる助けになると思っています」。

「もう1つは、男子バレエが普通に受け入れられるような環境をつくること。バレエは女性のイメージが強いですが、パ・ド・ドゥといって男女2人で行う演目もたくさんあります。昔から王様や貴族も踊っていたり、男子がバレエを踊ることは特別なことではなかったんです。でも、バレエ教室の看板や舞台の広告など、目に入ってくるバレエは女性が登場していることが多い。それを見るとやっぱり女性がやるものだよな、ってみんな思うじゃないですか。だからたとえば、バレエ教室の入口に貼れるような男子バレエ歓迎のステッカーをつくって配ったりとか、SNSで男子バレエの様子を発信するとか。男子がバレエをすることは普通なことだと広げていきたいです」。



新しいバレエの形をつくりたい

今年から高校2年生になる新川さんですが、ゆくゆくはバレエに関する事業を立ち上げたいと語ります。その背景には、幼少期からバレエ人生を支えてくれた母の影響がありました。「母も自分で事業を行っているんですが、それをずっと見てきたのも大きいです。バレエのハードルを下げるような事業をするのが夢ですが、そのために今何をすればいいのかアドバイスをもらったりしています」。大学生での起業を目指し、いくつかのアイデアも芽生えています。「バレエと出会う機会をもっと増やすためには、古典的なことも大切にしながら、今の時代の最先端を取り入れて進化させていく

ことも大事だと思っています。たとえば、映画やライブを見に行くような感覚でフラッと気軽に見に行けるようなバレエの野外ライブをやってみたり。古臭いイメージを変えるきっかけとして、バレエダンサーを育てていく育成系ゲームをつくることでもっとポピュラーで楽しいものだと知ってもらったり。夢はいろいろ膨らんでいます」。

日本でバレエを広めることにはこだわりつつ、視点を拡げるために海外で活動することも考えているという新川さん。「男子バレエを広めた男になることを目指します」と笑顔で語ってくれました。新川さんのバレエへの夢中な想いが日本中の人々に伝播して、バレエがもっと身近なものになる日もそう遠くないかもしれません。



Column

愛と情熱の バレエ物語

知れば知るほどおもしろいバレエの演目。密着取材時に踊っていただいた演目を、お気に入りポイントとともに新川さんに紹介していただきました。

白鳥の湖

悪魔ロットバルトによって白鳥に変えられてしまった王女オデットに、恋愛に疎い王子ジークフリートが一目惚れするという物語です。白鳥の湖の踊りは男女ともに優雅で美しいのが特徴。また、悲しみで表情に元気のない白鳥や、一目惚れをした王子、王子をだましたロットバルトなど、表情の違いも見ていて楽しいポイントです。

ライモンダ

十字軍遠征に行ったジャン・ド・ブリエンヌと婚約者の王女ライモンダの物語。あまり知られていませんがこれが一番好きです。ジャンの遠征中にアラブの王子がライモンダに求婚するのですが、帰ってきたジャンが王子を倒し、結婚式が行われます。重厚感がありつつも美しい音楽、踊りがかっこよくて大好きです。

ドン・キホーテ

スペインを舞台に男女が駆け落ちする物語で、個性的なキャラクターなども登場する、他とは一味違う演目です。特に男性のバリエーション(見せ場)はとても有名で、ダイナミックな技が連続して登場します。踊る人によって雰囲気がガラッと変わったり、技も変わってくるのが面白いポイントです。

海賊

おそらくバレエの中で一番ダイナミックな演目です。海賊たちがさらわれた恋人を助けに行く物語。まるで波打つ海のように激しい男性バリエーションが有名で、海賊首領の手下アリのバリエーションは力を見せる時はとことんやるという性格が出ていてとてもかっこいいです。終盤には難しい技が連発し、バレエ男子にとって憧れの踊りです。



新川 良羽 YOHANE SHINKAWA

プロのバレエダンサーを目指し日々練習に励むかたわら、床バレエインストラクターとしてレクチャーを行ったり、バレエや男子バレエを広める活動としてSNSへの動画投稿や男子バレエの啓蒙セミナーなども主催している。

Profile

癒やしを届けるシャボン玉で、
みんなの心も上向きに。

しゃぼん玉パフォーマンスに夢中
西森 志帆

夜空の下で始まった夢中

西森さんとシャボン玉パフォーマンスとの出会いは、SNSでたまたまイベント告知を見かけたナイトバブルショー。友だちと見に行ったその日の内に、一瞬でシャボン玉の虜になったと言います。「夜空の下、色とりどりのライトに照らされて飛んでいくシャボン玉が本当にキレイで。神秘的な音楽に合わせて青く光るシャボン玉がブワーンと飛んできた時は、本当に海の中にいるみたいでした。帰り道には友だちに『絶対にシャボン玉パフォーマンスをやる!』って宣言しちゃったくらい、惹きつけられたんです」。

のめり込むようにシャボン玉パフォーマンスに夢中になった西森さん。すぐにパフォーマーとして活動できる団体を探し始め、出会ったのが“京都シャボン玉飛ばし隊”でした。京都シャボン玉飛ばし隊は、コロナ禍にシャボン玉でみんなを笑顔にしたいという想いのもと創業者のトモさんにより結成された京都初のシャボン玉パフォーマンス集団。大学生を中心とした約70名のメンバーとともに、主に京都や大阪でシャボン玉パフォーマンスを行っている団体です。「京都シャボン玉飛ばし隊の“自分たちも楽しんでできる社会貢献活動”という活動理念もいいなと思って。早速トモさんに連絡をして、パフォーマーとして参加させていただくことになりました」。

笑顔がつながった初舞台

シャボン玉パフォーマンスの初舞台は、子どもたちへの体験会も兼ねたイベント。「初舞台ということもあるって、シャボン玉を上手に飛ばせるかどうかはやっぱり不安でした。それをトモさんに話したら、『上手に飛ばせるかは二の次で、とりあえずシャボン玉が出てさえいればいい。形が小さくても歪でも見てくれている人に届けることが笑顔を届けることにもつながるから。肩の力を抜いて楽しんでやってもらって大丈夫』というふうに言ってくださいって。おかげで、自分自身も楽しみながらパフォーマンスすることができました。それ以来、練習の時もパフォーマンスの時も、この時かけていただいた言葉は意識するようにしています」。

「パフォーマンス後は子どもたちへの体験会にも参加しました。道具を上手く使えずシャボン玉が全然出ない子がいたり、最初はどうなることかと思ったんですけど。教えてあげるスタンスじゃなくて、一緒にやってみようのスタンスで教えるようにしたら子どもたちも耳を傾けてくれるようになって。最終的には上手に飛ばせるようになって、みんなでキャッキャしながら楽しみました。保護者の方も楽しんでいる子どもの写真を撮ってニンマリしたり、一緒になってシャボン玉で遊んでいたり。その場にいた人たち同士が同じシャボン玉を見て、仲良くなったり、楽しそうにしている姿って温かさがあるなと思って、すごく幸せな気持ちになったことを覚えています。今でも一番印象に残っている思い出です」。



うつむいた心も上向きに

普段は住宅街の中にある小さな公園でシャボン玉パフォーマンスを練習しているという西森さん。練習中、老若男女さまざまな人から声をかけられることも多いそう。「散歩中の保育園児や先生がシャボン玉を見て喜んでくれたり、公園で休憩しているタクシー運転手の方にどうやって飛ばしてたのって興味を持ってもらったり。シャボン玉って、みんな小さい頃にやったことがあったり、それぞれの思い出があると思うんです。そこに重ねてもらえる部分もあると思うし、そもそもシャボン玉の美しさが人を引き付けているのかもしれないけど、シャボン玉を通して人とコミュニケーションを取れることが魅力のひとつだと思っています」。

「あとはやっぱり、シャボン玉を飛ばしていると自分自身も癒やされます。生活がドタバタしていて疲れていた時に、父にシャボン玉を飛ばしてたらと言われたことがあって。無心で飛ばし続けていたんですけど、遠くまで飛んでいったシャボン玉を応援するのも楽しいし、シャボン玉の影もキレイだし、空を見上げて飛んでいく姿を見ていたら自然と気持ちも上向きになりました。そういう癒やしに加えて、見ている人に褒めてもらえるっていう幸福感も乗っかってくる。シャボン玉パフォーマンスをするとみんなも喜んでくれて、やっている私もハッピーで、だからこんなに夢中になって続けられているんだと思います」。

こだわりから生まれたクリエイティビティ

じつは、京都シャボン玉飛ばし隊で使われているシャボン玉を飛ばす道具のほとんどは創業者トモさんの手作り。シャボン玉の形状や使い勝手を考え抜いて作られている道具を見て、西森さんもオリジナル道具の制作にチャレンジすることにしたそうです。「たとえば、シャボン玉を飛ばす時に使う道具は、吹き口になるチェーンの材質や輪っかの作り方でシャボン玉が出る量も大きさもかなり変わってくるんです。チェーンを紐にすると液が染み込みやすい分たくさん飛ばせるけど手入れが大変だったり、プラスチックにすると持続はしないけど飛ばせる形の自由度が上がったり。どんどん改善点が出てくるから、やっぱり理想の道具を自分で作るしかない!ってなりまして」。

ある時、軽くて扱いやすい道具を作りたいと家族に相談したことから思いもよらぬ発明品が生まれました。「道具作りの材料を探していた時、父が100円ショップで伸縮できる棒状の靴べらを買っててくれたんです。先端の靴べらを取り外して棒だけにしたら、長さも軽さもこれだ!ってくらいちょうど良くて。その後、私が見つけってきたプラスチックチェーンと、棒とチェーンを繋ぐジャストサイズの接続部品を母が見つけてくれて、家族総出でオリジナル道具を完成させました」。

ゆくゆくはシャボン玉液も開発したいと語ります。「自然光に当たった時にちゃんと発色したり、いい匂いがすることが理想。トモさんのブレンド液は本当にすごくて、虹色にキラキラするしすごく遠くまで飛んでいく。作り方は企業秘密ということなので、トモさんの液を目指して試行錯誤しています」。



原動力はみんなが楽しむ姿

じつはシャボン玉パフォーマンスだけでなく、ボランティア活動にも取り組んでいる西森さん。その根底には、みんなが楽しい空間を作るのが好きという原動力がありました。「中学1年生の時、地域のお祭の運営を手伝う学校の授業があって。それがすごく楽しかったので、高校生から本格的にボランティア活動を始めました。特にキッズキャンプのボランティアは今でも継続的に参加しています。キッズキャンプって子どもたちと

数日間ずっと一緒に過ごすから、ご飯を好き嫌いするとか、喧嘩になるとか、いろいろ起こる。でも一人ひとりとコミュニケーションを取って向き合ううちに、自立しようと頑張ったり、子ども同士で協力し合うようになったり、数日間ですごく成長していくんです。それを見守るのが幸せで。ボランティアとシャボン玉パフォーマンスでは子どもへの向き合い方は違うけど、人に喜んでもらってみんなが楽しい空間を作るという経験はシャボン玉パフォーマンスにも生かされてるなと思います」。



シャボン玉を、外に出るきっかけに

パフォーマーとしての経験を積み重ねていくうちに、叶えたい夢も生まれました。「シャボン玉パフォーマンスを、子どもたちが外に遊びに出る理由にしたいです。今って、家の中でゲームやスマホで遊ぶ子が増えて、外で遊ぶ子がきっと減っている。だけど以前、公園でシャボン玉を練習していた時にお話ししたご婦人が、子どもたちの元気な声を聞いて癒されるために散歩ルートに公園を入れているとおっしゃっていて。やっぱり子どもたちの元気な姿って必要なんだと思ったんです。だから、子どもたちが外に出るきっかけの1つにシャボン玉パフォーマンスがなれるといいなと。いつか、公園をシャボン玉と子どもたちでいっぱいにすることが目標です」。

京都シャボン玉飛ばし隊の活動では、難病の子が入院する

施設や被災地などに行くこともあるそう。そこにいる子どもたちのことを考えた時、パフォーマーとしての意識にも変化があったと言います。「外に出たくても出られない子がいることも忘れちゃいけない。見に来てくれる人を勝手に制限しないという意識を持って活動できる人でありたいと思うようになりました。今までではシャボン玉って、気持ちをプラスにするとか、プラスをもっとプラスにするとか、そういう意味合いだけだと思っていたんですけど。マイナスを〇にするというか、そういう心の癒やしとしても社会的に求められるんじゃないかなと思います」。

これからはパフォーマーとして技術を磨くだけではなく、京都シャボン玉飛ばし隊の活動支援やパフォーマー育成もしたいと語る西森さん。シャボン玉パフォーマンスを通して日本中に笑顔と癒やしを届ける西森さんの夢中は、これからも続いていきます。



Topic

京都シャボン玉飛ばし隊 師弟の夢中トーク

京都シャボン玉飛ばし隊の創業者トモさんと西森さんの対談インタビューの様子をお届け。
トモさん視点での西森さんの夢中をご紹介します。

— トモさんから見た西森さんの夢中は？

トモさん 京都シャボン玉飛ばし隊に入ってくれた時から熱量がすごかったです。シャボン玉液の配合や道具について繰り返し聞いてきたり、道具を作ってみたって言ってきた子は初めてでしたね。それくらいシャボン玉に夢中になっている子なのかなと。

西森さん ナイトバブルショーを見てモチベーションMAXのまま駆け抜けてるので、熱量がすごかったんだと思います。トモさんにも道具をどうしたらいかとか、めちゃくちゃ連絡していました(笑)

— トモさんから西森さんへのアドバイスは？

トモさん いやいや、もう本当に飲み込みが早いと思っています。

西森さん でも私、結構トモさんから心を穏やかにしたほうがいいって言われます。

トモさん それは僕もそうなんんですけど、子どもたちの期待に応えるような大きいシャボン玉を作ろうと思うと、集中して風を読みながら道具の広げ方や飛ばし具合を調整しないと難しくて。

西森さん 今は私がせっかちすぎて割れちゃったりするので、忍耐強く待ちつつ安定して大きいシャボン玉を出せるよう頑張りたいです。そうしたらパフォーマーとしても少しはレベルアップできるかなと。

トモさん 今後の活躍に大いに期待しています。将来どこかのタイミングで、シャボン玉液の作り方も伝授しようと思って。

西森さん ほんとですか！？やったー！！本当にいろいろサポートしてくださっているので、スキルや誠意でお返しできたらなって思います。



西森 志帆 SHIHO NISHIMORI

京都シャボン玉飛ばし隊でシャボン玉パフォーマーとして活動中。子どもも大人も自分自身も、笑顔でつながるようなシャボン玉パフォーマンスを目指して日々奮闘中。夢は、シャボン玉と子どもでいっぱいの公園をつくること。

Profile



京都シャボン玉飛ばし隊の
詳細や公演情報はこちらから

編集後記

今回で第3期を迎えた、夢中な若者を応援する「夢中dent」プロジェクト。今年も素敵な「夢中dent」のみなさんとの出会いがありました。

男子バレエを日本中に広めたいという新川さん。目の前で披露していただいたバレエパフォーマンスは、まさに圧巻の一言でした。バレエという夢に本気な新川さんだからこそ表現できる、ダイナミックで繊細で美しい男子バレエの魅力を肌で感じました。

シャボン玉パフォーマンスで癒しと笑顔を届ける西森さん。パフォーマンス中に印象的だったのは、その場にいた子どもも大人もみんなが空に飛ぶシャボン玉を見上げて笑顔になっていた様子。常に笑顔で楽しそうにパフォーマンスをする西森さんの周りには、たくさんの笑顔が広がっていました。

さまざまな夢中に出会えた今回の「夢中dent」プロジェクト。数ヶ月にわたる取材にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。2025年の夏頃には、同じく第3期生となる農業に夢中な大工原さんの取材レポートも公開予定です。また、第4期生も募集予定。次はあなたの夢中に出会えることを楽しみにしています！

種まきから収穫まで密着中！

夏頃公開予定！

夢中dent 3期生 大工原 美佐さん

農業 に夢中！



もともと野菜が苦手だったという大工原さん。幼少期に祖父母が育てた野菜の味に感動し、大学生進学を機に農業を始めました。小さい頃に心を打たれた野菜の味をたくさんの人々に届けることを夢に、祖父母に農業のノウハウを教わりながら日々奮闘しています。

誰かの夢中の笑顔を見たい。

子どもたちの目がキラキラする。

生き生きとした自分に生まれ変われる

こころもからだも安らいで暮らせる。

誰かを想って、つぎの新しいなにか、を生もう。

クラシエの商品をきっかけに、こころが晴れる。

何かをはじめられる。つづけられる。

暮らしへ、未来へ、たしかな希望がわいてくる。

そんな、夢中になれる明日をつくる。

夢中になれる明日
Kracie

上記は私たちのスローガンです。クラシエは「人を想いつづける」を企業理念に、シャンプー・ボディソープといった日用品・化粧品事業、漢方薬を中心とした 薬品事業、菓子・アイスなどの食品事業を展開しています。これからも「人を想いつづける」中で、夢中なあなたを応援するために、第4期「夢中dent」を募集予定です！

※夢中dentとは、何かに夢中な16~25歳の若者のこと。実際に学校に在学しているかは問いません。



夢中になれる明日

Kracie